

邦人救出事情と 「エルトゥールル号遭難事故」

一般社団法人 日本在外企業協会

常務理事・事務局長 近藤 龍



テヘラン駐在員夫人たち、平穏な日々が……

“バババリーーン!!”、真夜中の2時半、突然の耳をつんざくすさまじい音とともに苦難の1週間が始まった。

イラン・イラク戦争が始まって4年半が過ぎたある夜、イランの首都テヘラン、寝静まる郊外の住宅地に雷に似た衝撃音が何度か響きわたったかと思うと、遅まきながら空襲警報が鳴り響いた。「ついに来たか」慌てて飛び起きた妻や3歳と1歳の子どもを抱え階下の大家さん夫婦と、イラン軍の対空砲火がまるで花火のように打ち上がる最中、防空壕こうごうを兼ねた地下室に避難する。1985年3月、両国は空爆とミサイル攻撃で互いの首都攻撃を開始した。

トルコに救われ無事テヘラン脱出

テヘランに駐在していた筆者とその家族は、その夜以降、頑丈なホテルに移りテヘラン脱出のチャンスを探すことになるが、日本以外の国が自国民救出のため救援機を飛ばす中、日本からは日本航空も自衛隊機も来ず、邦人200人以上が命の危険にさらされることになった。

イラク軍爆撃機による連夜のテヘラン空襲から

4日目、イラクのサダム・フセイン大統領は48時間後の3月19日午後8時以降、イラン上空を飛ぶ航空機は軍用、民間を問わず無差別に攻撃すると宣言。各国民がイラン脱出ラッシュでパニックに陥る中、唯一救援機が来ないまま取り残された日本人の脱出は一層困難を極め、みな絶望的な気持ちになっていた。

この絶体絶命の危機を救ってくれたのは日本ではなくトルコだった。トルコのオザル首相(当時)は、日本大使や企業からの懇請もあり安全が確保できていない日本人の救出を決断、トルコ航空に救援機派遣を指示したのだ。直ちにトルコ航空はクルーを募り、多数のパイロットとCAが身の危険を顧みず自発的に手を上げた。

フセインが警告した無差別攻撃の始まる午後8時の数時間前に夕闇のテヘラン空港を飛び立った2機のトルコ航空機は、疲れ果てた日本人とその家族215人を乗せて灯火管制で真っ暗なテヘラン上空を抜け出し、光まばゆい大都市イスタンブールに無事着陸した。朝から行列に並び、怒号と混乱で喧騒状態けんそうの飛行場を後にして、ようやくイスタンブールに着いた筆者家族4人も疲労困憊こんぱいの中、大勢の報道陣に取り囲まれていた。

話はさかのぼってテヘラン空爆から95年前の1890年夏、オスマン帝国(後のトルコ)初の親善訪日使節団として明治天皇に謁見えっけんに来た軍艦「エルトゥールル号」は帰路、和歌山県串本沖で台風のために座礁し約580人の死者を出した。その際、紀伊大島の漁民は身を挺して69人もの乗組員を救助し、その後も村で献身的な治療と自分たちの食料を与えて介護した。トルコとの友好